

京都芸術大学（通学部）の教員養成に対する理念

本学は開設以来、我が国が今後更なる文化的発展と国際貢献を成し遂げようとする際、科学技術と経済理論だけではもはや立ち行かない岐路に立つ現代日本において、芸術文化の盛んな活動を通じて、日本の社会に生き生きとした創造的な力を与えること、またその活動を担う人材の育成をめざしてきた。そのため、芸術教育の高度化や国際的水準の芸術大学への発展を期して、芸術教育資格支援センターにおいても、芸術教育と研究の高度化を図るとともに、通信教育による芸術教育を実現し、芸術教育の普及と「芸術を社会に活かすことの出来る人材」の輩出に努めてきた。

本学教職課程においては、教員免許状の取得と共に、今日の多様な価値観の存在を認め、芸術・文化・社会・教育に対する幅広い知識と技術を養うこと、教員としての社会的役割と使命を明確にしたうえで、それらを主体的に実行することのできる教員養成をめざしている。また、「芸術」の社会的役割や、美術教育の意義を深く理解し、学校での教員としての実践力を身につけることを目標としている。特に生徒や一般市民の方とのコミュニケーション技術の習得など、現場での実践に即した能力の育成を重視し、これらの能力、技術に対して、芸術を介して社会に貢献する人材育成を実践するために、学科ごとに教員養成理念を設定し、科目を開講している。

各学科の教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画

①学科の教員養成に対する理念あるいは目標

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定、あるいは教育課程外での活動など

・美術工芸学科

①従来の、教える（ティーチング）から子供たちの能力を引き出す（コーチング）力の強化を目指す。教育現場において、特に芸術に関わる指導者に求められる資質は、まずは子供たちが秘めている独特の直感力や物語の種を見出し、聞き出すという「聞く能力」である。次に、時代の精神に則りながら、歴史の前例や他ジャンルの表現を学び続け、幅広い教養を元に、生徒たちに豊富な事例を紹介するアーカイヴを持っている事である。ゆえに、常にコーチング方法を学び、自己の知識と技術を更新する意欲的な創造者を育成することを目指す。

②芸術を広く民主的な社会構築に役立てるべく、従来の芸術至上主義を是とせず、社会の一員として、時代と常に対話しながら創作活動を行う意識を醸成する。また自らの学びと同時に、自作を人々に語り、かつワークショップを主宰する双方向性の能力を、創作活動と平行して学ばせる。受け身の制作をさせず、常に課題の意義と意味を言語的に理解した上で、芸術家特有の直感力に言語力を並走させて、学生の自立心と自律心を育てる。要素技術に関しても、明確なビジョンとアティテュードを持たせた上で、各分野で十分な反復基礎練習を行うこととする。

・マンガ学科

①次のような目標を掲げる。

- ・学校教育の一環としてマンガに取り組み、芸術作品としてのマンガの位置づけを語れる教員
- ・絵画のなかの物語性を指導することのできる教員
- ・豊かな想像力、発想力を持ち、多角的に物事を見ることができる教員

② 講義系科目を通して

マンガの歴史、種類、国際的な相似と相違、などの正しい知識を身につけ、芸術作品としてのマンガの位置づけを語れる。

演習科目を通して

日本独自の「ストーリーマンガ」というジャンルを指導するにあたり「絵画の中の物語性」を理論的に解説し、また「物語作り」の作業の中で人生の疑似体験をすることによって「人間的成長」を促す。

キャリア研究科目を通して

「漫画家＝おたく＝ひきこもり」といった図式を払拭するために、積極的な学外でのワークショップやプレゼンテーションの機会を用意。なによりマンガならではの「豊かな想像力、発想力、行動力」で社会に貢献する喜びを学ぶ。

・キャラクターデザイン学科

①キャラクターデザイン学科では、「他者との相互理解」というキャラクター創作の基本をふまえ、芸術立国の理念を元に広く世界を見据えた人間力の育成を目指している。

各種教職課程カリキュラムを通して、それぞれの授業目的、7つの能力の修得によって物事の本質を理解し、客観的視点によって第三者に伝える事のできる人材を育成する。

また「教育」以前に芸術・デザインのあり方を深く学び、本学のカリキュラムを通して新しい芸術教育を創造し、実践できる教員養成を目的とする。

②「デッサン基礎・応用」「立体造形基礎」「映像制作」「映像技法」「プレゼンテーション」といった教職課程カリキュラムに内包される芸術教養の基本を身に付けるため、技術の修得に加えて能動的に観察・考察する力を重要視する。

・情報デザイン学科

①「ビジュアル・コミュニケーションを学科教育の基軸とし、世界に溢れる多様な情報から価値ある情報を創り出すデザイン思考によって、社会に新たな豊かさを提案できる人間を育成する」という教育目標のもと、人と社会の「関係の価値」を育てる学びを通して、次代を担う人材を育成することのできる、デザインの視点をもった教育者を養成する。

②「情報デザイン基礎 I- II」を必修とし、観察の掘り下げから思考を発想につなげる力を、教

育者として習得すべき学びの核心に位置づける。加えて「情報デザイン基礎 III-IV」「デザイン技法 I-II」「表現演習 I-II, V, VII-VIII」「総合演習 I-II」を選択科目として設定する。

※上記は 2014、2015 年度入学生のための科目。他年度入学生については、同等の科目群を設定する。

・プロダクトデザイン学科

①プロダクトデザイン学科では、身近な道具、家具などのデザインを通して、豊かな生活を提案する能力を身につける。それらを応用し、デザイン、芸術を生活に活かせる教員の育成を目指し、次のような目標を掲げる。

- ・デザインと美術の視点から、芸術教養をとらえ直すことのできる教員
- ・芸術と共に生活する楽しさや豊かさを伝える教員
- ・人間の明日の生活を豊かにする技術や創造力、発想力を教える教員

②学科で準備する科目では、デザイン画、デザインモデル彫刻、コンピューター演習などを教える科目で、基礎的なデザイン、芸術的なスキルを磨くと共に、プロダクトデザイン総合演習など、総合的なデザイン演習科目を通して全体的なデザイン、芸術を構想する訓練を行う。それらを通して、デザイン、芸術を生活に活かせる教員の育成という上記目標の達成を目指す。

・空間演出デザイン学科

①空間演出デザイン学科では、社会における課題に対峙し、デザインを通じて解決すること、かつ、それによって新たな社会的価値の創出に取り組もうとする人材を育成する。そのために空間やファッション領域のデザインにおいて、基礎的な造形から実践的応用までを学び、さらにそれを社会に生かすべく自ら活動できる主体性や、人々と協働するためのコミュニケーション能力を養成する。それらの能力を総合的に発揮できる美術教員の育成を目標とする。

②授業カリキュラムでは、空間・ファッションデザイン基礎やデザイン表現基礎のようにデザインの手法や造形を基礎的に学ぶものから、社会の課題解決のデザインを行う応用領域としての学科授業など幅広く学ぶ構成となっている。また、教員にとって必要なコミュニケーション力も重視している。

・環境デザイン学科

①本学の基本使命と建学の理念の中にある、他者の痛み想像力を働かせ、多くの人々の幸せのために、芸術的創造と哲学的思索によって新しい人間観・世界観を生み出すことを、教育の場で実践する教員を養成する。

「環境デザイン」は人間が生きる場のすべてを対象とする。そこに芸術的（美的）要素が付加されることにより生まれる、より豊かで潤いのある環境は人々を幸せへと導く。芸術大学における環境デザインの学びを通して、人々に幸せをもたらすものとしての美術教育に取り組んで

ほしい。

②「美術論」「美術史」と絵画、彫刻、工芸の基礎演習を必修によるコア科目として設定し、その上で「デザイン基礎Ⅰ」から「環境計画Ⅵ」まで、学科教育の根幹として位置付けられている1～4回生までの全てのデザイン演習科目を履修させる。このことにより環境デザインの実践力、芸術の基礎的表現力、美術の基礎知識の3領域を総合的に身につけた教員の養成をはかる。

・アートプロデュース学科(2014年度に芸術表現・アートプロデュース学科より学科名称変更)

①これまで制作に重きをおいてきた日本の美術教育界は近年、鑑賞教育を行える教員を求めている。作品に意味を見出し、価値を付加していくことのできる主体的な鑑賞者(文化の享受者)の育成が、美術の未来のために急務だからだ。鑑賞力は制作する場合にも重要な能力だ。なぜならば、制作者は自分の作品の最初の鑑賞者だからだ。こうした美術教育界における鑑賞のニーズの高まりに応えられる人材育成を、本学科は目指している。

②「アートとは、作品と鑑賞者の間に起こる不思議で深遠なコミュニケーション。」「教育とはコミュニケーションなしでは成立しない。」こうした考えのもと、本学科では「みる、考える、話す、聴く」を駆使して、グループで鑑賞を行うACOP(Art Communication Project)」という必修授業を設けている。年間を通して行われるこの授業で学生たちは鑑賞能力を身につけ、そして作品と鑑賞者を結ぶファシリテーターとしての訓練も受ける。つまりACOPは「コミュニケーションを介した鑑賞教育」であり且つ「鑑賞を介したコミュニケーション教育」でもある。この授業を通して学生たちは観察力、論理的・批判的思考力、コミュニケーション力、セルフ・エデュケーション力を身につけ、同時に協働の重要性も学んでいく。さらにACOPの授業で学んだことを学外(美術館や他の教育機関)などで実践する場も多数設けている。

・こども芸術学科

①こども芸術学科においては、次のような教員の育成をめざす。

- ・芸術の創造性を人間教育の根幹に位置づけ、芸術を通して子どもの人間性を育む教員
- ・子どもを取り巻く環境を深く理解し、ともに感性をひらき成長を支えることのできる教員
- ・健康や福祉の領域において芸術のもたらす効果を発見し、社会的意義を問いかけよりよい未来を築くために実践する教員

②1年次で保育の基礎理論を学び、さまざまな素材に触れながら造形表現の基礎を修得するとともに、身体感覚、身体的知を基盤としたアートワークを実践する。2年次では、子どもたちとのかかわりにおける「気づき」の力を育む。芸術のもつコミュニケーション力を媒介として、自然、環境、モノ、人間、地域といった多様な領域を総合的に学び、身体を通して実感する。3・4年次では、美術館、社会福祉施設、行政の地域活動、NPOなどの市民活動、地域の幼稚園や保育園と連携し、芸術を通じたコミュニケーションを実践する。特に4年次で希望する学生

には、各種実習での体験をもとに「こども・芸術・教育」への関わりを深化させるテーマを設定し、学生の多様な進路のバックアップを行う。

これら一連の教育課程から、教職課程においては、芸術を通して人間の日常生活を見つめなおし、子どもの活動がいかに芸術活動と密接であるか、また分かちがたいものであるかを知るとともに、子どもたちへ芸術と共に生活、成長する楽しさや豊かさを教え、人間性を育む教員を育成することをめざす。

・歴史遺産学科

①歴史遺産学は歴史遺産（文化財）の伝承を、作品や歴史事象自体を学術的研究によって評価し、保存修理に関する研究によって具体的に残す方法を模索する学問である。その実践＝伝承においては、広く社会の中で、歴史遺産（文化財）の重要さが認識され、人々がそれを頻繁に活用する事が必要である。それを実現するには子供の頃から興味を持たせることが必須であり、学校教育の中でそれを伝える事のできる社会科教員の養成は、本学科の目的を達成するために欠かせない。

②歴史遺産学科では講義、演習などの授業科目を開講し、学生が歴史遺産（文化財）の伝承についての基礎を習得できるようにしている。特に、1・2回生では様々な歴史遺産（文化財）の歴史や様式について、3・4回生では演習や卒業研究を通して、それらを分析し、論理的に組み立てる訓練を行っている。また、調査、保存修理の実践は日本庭園・歴史遺産研究センターの事業やその他のプロジェクトなどによって体験できる形を整えている。

・大学院芸術研究科

①芸術研究科の教育目標は、広い視野に立脚しつつ、個別専門領域のなかにテーマを発見・展開する能力を教授し、「理論研究と制作により新たな文明のパラダイムを構築する原動力となり得る人材」、「高度な専門性に加え、より広範な学識を有する創造性豊かな優れた学術研究者、芸術文化を多様に支える人材」を輩出することである。また、「芸術」の社会的役割や、美術教育の意義を深く理解し、「芸術を介して社会に貢献する人材」としての実践力を身につけることを目標としている。

美術の教科については、従来の絵画・彫刻などの個別分野における専門性の追究のみならず、複合的な視座から造形思想を深め、基礎制作を踏まえつつ、創造力と表現力を発展させることによって個性的で清新な創造世界を展開し表現できる教員を養成する。

社会・地理歴史の教科については、芸術に関する基礎理論に加えて、比較文化的視点や歴史的視点など、芸術文化を多角的に検証し、歴史的に継承されてきた有形・無形の文化財を構成する素材・技法の研究から、これらの背景にある時代や哲学、宗教、文化交流の足跡までを解明できる専門知識と分析技術をもった教員を養成する。

②芸術研究科では、芸術文化の基底となる考え方と研究の基本的道筋を学ぶ「芸術文化原論」、専門領域における「演習・研究」ならびに「分野特論」の履修によって、個別の専門性を深化させるとともに、複数教員によるゼミ指導の実施し、他領域との合同プログラムを充実させることにより、専門性を越える領域横断的な知見の獲得を目指している。

また、学士課程開講科目の運営補助、課外での作品展覧会の実施、学術団体主催の研究会参加、インターンシップなど、現場での実践に即したコミュニケーション技術の習得を重視している。

京都芸術大学（通信教育部）の教員養成に対する理念

本学は「京都文藝復興」を掲げ、アジアの叡智に育まれた日本文化の創造的伝統を、京都を起点に復興し、芸術の力によって現代文明の矛盾を克服して平和で活力ある新しい世界を創出する「芸術立国」への道を目指しています。現代文明に対する深い洞察力と、よりよき未来を構想する力を養い、多様な価値観を認め、芸術・文化に関する広範な知識・技術を持つと共に、自身の芸術的創造力をさらに高めて現実の社会においても発揮する力を有し、平和で美しい社会の実現に貢献する人材を世に送り出すことを教育目標とします。よって本学教職課程における目的も、この理念に沿って専門教育を基盤とした美術科教員の養成を行い、それぞれが受けた高度な専門教育を活かして、中学校や高等学校の生徒一人ひとりの自己形成に関わる教育的資質を持ち、自然や文明に対する深い洞察力を通して、真に平和教育に貢献できる教員養成を目指すことにあります。また一教科の教員というだけではなく、学校という場を交流と創造の場と考え、芸術を通して学校運営に主体的に取り組める役割を担うことも重要と考えます。

各学科の教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画

①学科の教員養成に対する理念あるいは目標

②上記を達成するための計画（教育課程、授業科目設定、あるいは教育課程外での活動など

・芸術学科

①芸術学科では、世界各地の文化芸術において、研究、編集、保護、制作の分野で、生涯にわたり各自に適切な研鑽を積み相互交流の機会を創造する人材を輩出することを目標としている。

教職課程においても、美術の授業を通じ、自分の力で情報収集し、公正な判断のもとで文化や芸術の問題を考察ないしは解決することができること、文化芸術についての知識や技能の修得に精進し、そのことをもって自他の人生を豊かにできることを体現しうる教員の養成を目指している。

②そのため美術科教育各領域の基礎的な力を養成する科目に加え、総合教育科目として、自発

的な学習を促す「哲学への案内」や「科学への案内」などの科目、地域との関わりを意識するため「地域表現演習」などの科目を置き、また単なる美術の準備科目ではなく、自分の目で世界をしっかりと認識するために「デッサン基礎」等を設けている。さらに専門教育課程では、それぞれの専門分野を深めつつ、今日の社会で芸術的な問題に関して教師の持つべき見識を十分に育てることを図っている。

・美術科

①美術科では絵画、工芸、写真の各分野での特性と歴史的表現を踏まえ、専門とする技法に習熟し、自らの生きる時間と場所を尊重しながら、継続的に創作と表現の探究に努め、学んだ芸術的素養を生かす場を作る人材を輩出することを目標としている。

教職課程においても、美術の授業を通じ、基本的な材料の扱いや知識を修め、技法と技術を持続的に向上できること、表現を発展させるため足元を掘り下げるだけでなく、新しいことに挑戦できることを体現しうる教員の養成を目指している。

②そのため美術科教育各領域の基礎的な力を養成する科目に加え、総合教育科目として、自発的な学習を促す「哲学への案内」や「科学への案内」などの科目、地域との関わりを意識するため「地域表現演習」などの科目を置き、また単なる美術の準備科目ではなく、自分の目で世界をしっかりと認識するために「デッサン基礎」等を設けている。さらに専門教育課程では「造形基礎演習」などを通じ、それぞれの専門分野を深めつつ、今日の社会で芸術的な問題に関して教師の持つべき見識を十分に育てることを図っている。

・デザイン科

①デザイン科では人間の環境をとりまくモノのカタチを見つめ直し、新しい価値観のもとで、その意味を考えなおす視点を育成し、平面や立体から空間や環境のデザインまで、自己の生活探究からプロのデザインまで、未来をつくる実践力を持った人材を輩出することを目標としている。

教職課程においても、美術の授業を通じ、自分の力で情報収集し客観的な判断のもとで提案をまとめること、自分の価値観や提案が説得力を持って他者に説明できる能力を体現しうる教員の養成を目指している。

②そのため美術科教育各領域の基礎的な力を養成する科目に加え、総合教育科目として、自発的な学習を促す「哲学への案内」や「科学への案内」などの科目、地域との関わりを意識するため「地域表現演習」などの科目を置き、また単なる美術の準備科目ではなく、自分の目で世界をしっかりと認識するために「デッサン基礎」等を設けている。さらに専門教育課程では「デザイン基礎1」「デザイン基礎2」などを通じ、それぞれの専門分野を深めつつ、今日の社会で芸術的な問題に関して教師の持つべき見識を十分に育てることを図っている。

・芸術研究科

①芸術研究科では、今日の世界の芸術環境を育む活動の源泉となる人材を送り出すことを目標としている。

教職課程においても、美術の授業を通じて、世界の中で芸術活動の持つ営みを十分に自覚して研究・制作を行うこと、さまざまな専門分野での知見を深め、それを継続的に更新できること、他者を尊重しつつ自律的に研究・制作活動が遂行できることを体現できる教員の養成を目指している。

②そのため「芸術環境論特論」「芸術環境原論」で芸術活動と個人の生活圏の関わりを考察し、それぞれの地域社会で芸術によってどのように生きる力を育むことができるかという課題に取り組むと共に、それぞれの修了研究・修了制作を通じ、みずからの高度な専門性ある能力によって問題解決を行うことを経験することが必須となっている。

これらにより、専門的に深い知識を持った教員であるだけでなく、国際的視野から教育にあたる意識、そして具体性のある問題を学習者とともに解決する能力を身につけることを図っている。